

様式4A

学 位 論 文 要 旨

学位請求論文題名

就労男性 2 型糖尿病患者の食事に対する家族サポートの構造

著者名

北川 麻衣

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻

看護科学 領域

慢性・創傷看護技術学 分野

学籍番号 1929022011

氏 名 北川 麻衣

主任指導教員名 大桑 麻由美

副指導教員名 多崎 恵子

副指導教員名

背景

2型糖尿病患者にとって食事管理は治療の基本である。しかし、食事管理の実施に伴うライフスタイルの変化は多くの要因が関係し、特に就労2型糖尿病患者は、就労が食事管理に影響し、適切な管理が困難な状況である。ライフスタイル管理支援において、代表的なソーシャルサポートは、患者の利用できるサポート資源やニーズといった患者視点に基づくことが重要である。代表的なインフォーマルサポーターである家族のサポートを受けることにより糖尿病コントロールが改善する。家族サポートは、患者のニーズに性差があり、特に食事管理は伝統的な性役割の背景が影響するため性差を考慮する必要がある。就労糖尿病患者の約8割が男性であること、男性の食事管理行動が不良であることを踏まえると就労男性糖尿病患者に対する支援は急務である。以上より、就労男性2型糖尿病患者の食事管理を良好にするために、家族サポートを受けることは重要であるが、就労男性2型糖尿病患者を対象とし、食事管理を良好にする家族サポートを明らかにした研究はない。そのため、就労男性2型糖尿病患者の食事管理を良好にするための家族サポートの働きに着目し、患者・家族への援助方法を見出す必要があると考えた。先行研究において、就労男性2型糖尿病患者が捉える食事に対する家族サポートの構造を明らかにし、家族サポートを測定する尺度を作成した。その結果、自宅のみならず就労中での食事管理場面に対するサポート内容で構成され、患者が捉える食事管理場面を反映した因子構造をもつ尺度が開発された。また尺度は食事自己管理行動と関係していることが明らかとなった。以上より、本研究の目的は就労男性2型糖尿病患者の食事管理を良好にするために有効な家族サポートの働きを明らかにするため、ソーシャルサポートモデルに基づき、構造モデルを検証することである。意義は、就労男性2型糖尿病患者及びその家族に対して、家族サポートを活用した新たな看護方法を提示する。

研究方法

質問紙を用いた横断研究を行った。研究対象者は、18-75歳の就労している男性2型糖尿病患者で、現在一人暮らしでない者とした。調査施設は、日本全国の代謝・内分泌内科の診療を行う病院及び診療所25施設であった。質問紙は、対象特性及び就労男性2型糖尿病患者の食事に対する家族サポート尺度をはじめとする、サポートに関連する5つの尺度で構成した自記式質問紙を用いた。家族サポート尺度は、下位尺度「仕事と食事の両立の困難さを理解したうえでの関わり」、「食事療法をいつも守るための導

き」、「工作中的血糖変動を最小限にするための準備」、「陰ながらの工夫をする毎日の食事」、「一緒のものを一緒に食べる食事時間」、「患者のためだけにひと手間かけた食事」で構成される全31項目の尺度である。分析は、はじめに特性間の関係の検討を行い、その結果を踏まえて仮説モデルを作成し検証を行った。特性間の検討では、記述統計、相関分析、t検定、重回帰分析を行った。仮説モデルの検証では、記述統計、相関分析、構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling : SEM)を用いた。

結果

回収数 123 部(回収率 : 41.7%)、有効回答数 92 部(有効回答率 : 74.8%)であった。平均年齢は 55.3±9.5 歳、平均 HbA1c は 7.2±0.8%であった。状況の特性であるストレスと個人の特性の関係検討の結果、いくつかある個人特性のうち婚姻状況のみに有意な関連がみられた。次に個人の特性を除いて仮説モデルの検証を行った。その結果、仮説モデルは識別されなかったため、修正指数、適合度指標を参考にモデルの修正を行った。最終的なモデルの適合度は、GFI = 0.964、AGFI = 0.916、CFI = 0.99、RMSEA = 0.042 であった。モデルは 6 因子で構成され、食事自己管理行動に影響を与える構造を示した。そのうち、家族サポート尺度「工作中的血糖変動を最小限にするための準備」、「患者のためだけにひと手間かけた食事」、「仕事と食事の両立の困難さを理解したうえでの関わり」の 3 因子が構造モデルに投入された。

考察

本研究は就労男性 2 型糖尿病患者の母集団を代表した標本であり、食事管理を良好にするための家族サポートの働きをソーシャルサポートモデルに基づき、構造モデルにより明らかにした。モデルは家族からの「工作中的血糖変動を最小限にするための準備」、「患者のためだけにひと手間かけた食事」、「仕事と食事の両立の困難さを理解したうえでの関わり」サポートを受けることが、良好なソーシャルサポートに繋がり、食事自己管理行動を良好にする方法として有効であることを示した。

結論

就労男性 2 型糖尿病患者及びその家族に対する食事管理支援において、「工作中的血糖変動を最小限にするための準備」、「患者のためだけにひと手間かけた食事」、「仕事と食事の両立の困難さを理解したうえでの関わり」の家族サポートに着目するという新たな看護方法を提示した。

博士論文審査結果報告書

学籍番号 1929022011

氏名 北川 麻衣

論文審査員

主査(職名) 津田 朗子 (教授)



副査(職名) 多崎 恵子 (教授)



副査(職名) 大桑 麻由美 (教授)



論文題名 就労男性2型糖尿病患者の食事に対する家族サポートの構造

論文審査結果

【論文内容の要旨】

2型糖尿病患者の基本的な治療・療養は、ライフスタイル管理にあり、中でも食事療法は必須である。就労男性2型糖尿病患者のライフスタイルの中心は仕事であり、その糖尿病管理支援においては、社会的文脈すなわち、家族、仕事仲間、パートナー、医療従事者などの資源により提供されるソーシャルサポートの活用が重要とされている。ソーシャルサポートを受ける患者ほど食事管理が良好であることから、殊に食事管理支援においては、生活を共にする家族からのサポートが特に重要である。本研究の目的は、Norbeckのソーシャルサポートモデルを基盤とした、『就労男性2型糖尿病患者の食事管理を良好にするために有効な家族サポートの働きを明らかにする構造モデル』を描くことであった。先行研究(博士前期課程)で開発した就労男性2型糖尿病患者の食事に対する家族サポート尺度(FSS-DMW)を含む、質問紙を作成・配布し、構造方程式モデリング(SEM)により構造モデルを作成した。対象者は18-75歳の就労男性2型糖尿病患者であり、一人暮らしでない者であった。質問紙の配布数は295部、回収率41.7%、有効回答数92部(有効回答率74.8%)であった。対象者の概要は55.3±9.5歳、HbA1c 7.2±0.8%、同居家族・配偶者80.0%、食事の準備・配偶者71.7%であった。

構造モデルは6因子で構成された。帰結は食事自己管理行動であり、3経路があった。①ストレスがソーシャルサポートに負の作用を及ぼし、ソーシャルサポートは食事管理行動に正の作用を及ぼす。②家族サポート【ひと手間かけた食事】と【両立の困難さの理解】はソーシャルサポートに正の作用を及ぼし、ソーシャルサポートを介して、間接的に食事管理行動に正の作用を及ぼす。③家族サポート【ひと手間かけた食事】は食事管理行動に正の作用を及ぼす。FSS-DMWの3因子が投入された本モデルは、 $\chi^2=10.426$, $P=0.317$, $GFI=0.964$, $AGFI=0.916$, $CFI=0.99$, $RMSEA=0.042$ という高い適合度を示した。

【審査結果の要旨】

2型糖尿病患者の食事管理には、家族からのサポートが重要であることは数々の報告があったが、本研究は就労男性2型糖尿病患者の食事管理に対する具体的な家族サポートの在り方を示した新規性の高い研究であった。質疑応答では、研究デザインに基づく手順や分析方法について、また研究の限界について適切に述べていた。今後の臨床活用においても考察を深めることができた。以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。